



毎月十五日発行 所 社 会 像 大 宗 像 福岡県宗像支庁支庁 電話 0946 1311 代 定価 一年送料共 1000円

神具、装束、結婚式用品、九州店、福岡市博多区東区二丁目一丁目(八三三) 電話福岡(093)六五二一九四(五六番) 本社、電話宗像(0946)六六八(八五番) 電話宗像(0946)三三三(四四番) 電話宗像(0946)三三三(四四番)

春季大祭齋行

春雨の境内に雅楽の調べ流る

宗像大社春季大祭は、神苑の桜花の蕾もふくらみ咲き初め、鶯の囀りも一段と研ぎのかかった、三月三十一日より四月二日まで三日間、盛大に斎行された。三月三十一日、午後六時、葦津宮司以下神職一同奉仕

のもと、宵宮祭が、明日かの大御祭の無事盛大を祈念して斎行された。四月一日、昨夜以来の春の風を思わせる天候もいくぶん回復したものの生憎の雨に見舞われた。

儀が執り行なわれた。地元の青年団奉仕により、雅びやかな舞臺に受けつた多数の崇敬者の見守る中、拜殿に昇殿、神前に海川山野の幸が献供され、葦津宮司の国家鎮護・五穀豊穡の祝詞奏上につき、続いて、郡市の氏より選ばれた、神湊の吉武弘美氏が代表となり、氏子奉務に奉納された。

四月二日、前日までの春雨も、一転、晴れたり、愈々春本番、絶好の天候となった。午前十一時、本殿に於て、春季大祭第二日祭が厳粛に斎行、祭典に引続き、献上若布の功労者の表彰が執り行なわれ、宮司より、感謝状と記念品が贈呈された。

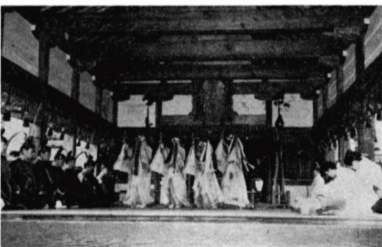
午前十一時四十分、新装なった宗像護国神社に於て、春の大御祭を斎行、市郡内五ヶ市町村長、議長、福祉協議会の役員、遺族会

々員等、多数参列のもと、護国の英霊をお慰め、新しき日本の平和と幸福を祈念した。又護国神社再建の由緒を記した銅製銘版を奉納された朝日ロカネ社長・乙藤昌弘氏に感謝状並に記念品が贈呈された。引き続き、宗像会々員全員、清明殿に参集の上、直会が清われ、和氣あふましい中に散会した。

午後二時、本殿にて、南坊流小方社により、献茶の出づ風の冷たさも梅林の美しさも、大鳥 屋形とみえ、菜の花は野の窓に丈のびてほのかに匂ふ小陽に向ひつつ、大鳥 大島 勝代、喚き初めし丘の上なる梅畑今朝うぐいすの初音透り来、大鳥 中村 五月、雪雲を集めて重き広場に焚火囲みて老ら集る、大島 板矢あきえ、物忘れこぼしつ亡き師の賜びし帯を探て一日終りぬ、大鳥 藤田よし子、谷底より湧き流るる朝もやに大鳴の尾根遠くかすめり、大島 目原 節子、虚飾ともなほ想ひつづ人並に吾子の披露豪華やき終る、大島 豊福 猪走、久方の大漁にわく漁師らの交信の声無難無難室、大島 岩瀬 辰夫、さし芽か十年経たり沈丁花若く豊かに部屋まで匂ふ、大島 吉村 三郎、うつろいし窓の陽射しやはらかに透き間は今だ冷たく、(四面につづく)



風俗舞



浦安舞

初詣でにおもふ

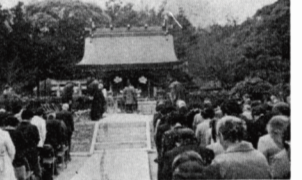
いつもの年のことながら、正月の神社への初詣では盛大で、日本民族のなづよい神道意識の変らないことをしめた。日本人の社会意識の健在であることをしめしめてみる。この事実の重大さを確りと認識しておくことは大切である。

遠からざる歴史を、少く考へてみるがよい。今を去る三十七年前の昭和二十一年の正月、日本が占領されて神道指令が発せられて直後の明治神宮の初詣では、戦前には百三十八万だった

のが、急減して一万四千一人になったと記録もある(現代史出版会編、秘録「占領と天皇」からの引用数字)。しかしこの数字は必ずしも正確かかわらぬ。社務所の記録では、元日かから七日までの間には、十三万五千とある。しかし、それにしては淋しい。その後も急速な回復は望みがたぐ、二十四年、二十五年のころは七日間で、十万人には達しては来ない。

除々に増加しては来たが、占領中は三十万人には達しては来ない。このやうな数字は、とくに明治神宮などで著しいが、指令がもっとも重圧の必要を感じた神道の国家意識の衰亡

の必要を感じた神道の国家意識の衰亡、余への懸絶せる初詣の上昇は、日本



(宗像護国神社)



(献茶祭)

第二一回 宗像大社歌会詠草

毎月一日ノ切詠草到着順

- 王丸 小方 正人 病床に細りたる腕差し伸べてからくも明日を引き寄せていく
- 吉留 高山 信子 切りて干す大根端々し冬の陽に輝く白さまぶしかりけり
- 古賀 吉武 邦夫 古い我が呆けしごと小書庫に三月の陽を背に浴びてをり
- 原町 塩川ハルコ うつらと庭の紅梅雪を冠り紅白二色に咲くがごと見ゆ
- 通り堂 木梨よしの 春を待つ思いをそらに芍薬の芽吹きしあたり落葉かきかす
- 須恵 早川 フサ 梅咲けば水戸、熱海を思い出づ風の冷たさも梅林の美しさも
- 大鳥 屋形とみえ 菜の花は野の窓に丈のびてほのかに匂ふ小陽に向ひつつ
- 大鳥 大島 勝代 喚き初めし丘の上なる梅畑今朝うぐいすの初音透り来
- 大鳥 中村 五月 雪雲を集めて重き広場に焚火囲みて老ら集る
- 大鳥 板矢あきえ 物忘れこぼしつ亡き師の賜びし帯を探て一日終りぬ
- 大鳥 藤田よし子 谷底より湧き流るる朝もやに大鳴の尾根遠くかすめり
- 大島 目原 節子 虚飾ともなほ想ひつづ人並に吾子の披露豪華やき終る
- 大島 豊福 猪走 久方の大漁にわく漁師らの交信の声無難無難室
- 大島 岩瀬 辰夫 さし芽か十年経たり沈丁花若く豊かに部屋まで匂ふ
- 大島 吉村 三郎 うつろいし窓の陽射しやはらかに透き間は今だ冷たく
- 吉留 白木うめの 地球儀を廻してさかす動乱のつつく小さき国の在処を
- 福岡 広渡一寿軒 ストープに直樹つけて目刺焼き酒に紛らす留守居らし
- 宮田 片山 一 雨降れば雨の音風吹けば風の音も聞こえずなれり部屋に籠れば
- 池田 永富 鎌 鯉捕り終へし若者四五人が焚火を囲み酒まはし飲む
- 自由ヶ丘 後藤君代 引く水の岩間をくり宛めぐり警吹く風に光りて清し
- 日里 清原 絹代 いつの日か老人ホームに入るわれの不用の品をしまえり
- 津丸 古賀 文月 鉢植に野ばたん花の一つ咲き一日命のあらん限りを
- 福岡 二宮 末子 コジュウの落葉かむりてかくれて我が足元を飛びて肝冷ゆ
- 田久 小方 実 二泊三日無用と思ふ弁当を心して嫁が読えくれぬ
- 香雅 桜井 ツ子 枯草を伝ふてんう虫の小さき紅手をとめて見つ日溜りの敵に
- 津丸 松尾 豊 待ちてみし春雨がにも椎茸は椿木一面覆いて生えたり
- 田熊 繁津かつ代 寒気閉去れば又来る予報のまつぎきて春の彼岸近づく
- 村山田 金丸 柳蔵 伸びゆけて孫の卒業記念樹の榎の木植うる銀光る
- 箱崎 吉村 三郎 うつろいし窓の陽射しやはらかに透き間は今だ冷たく

春まつり神賑行事 盛大に行なわる

一日 剣道大会、三日 吟詠大会

奉納剣道大会

四月一日、午前九時より恒例の春季大祭奉納剣道大会が開催された。



奉納吟詠大会

宗像大社春季大祭恒例の奉納吟詠大会が去る四月三日、午前十一時より当社清明殿において開催された。

- 小学生の豆剣士には、かけたた体育館いっばいの観覧者からさかんな拍手が送られた。

宗像大社春季大祭恒例の奉納吟詠大会が去る四月三日、午前十一時より当社清明殿において開催された。

宗像大社春季大祭恒例の奉納吟詠大会が去る四月三日、午前十一時より当社清明殿において開催された。



わかめ 和布献上者表彰

四月二日

去る四月二日、当大社春季大祭第二日祭に引続いて、和布献上功労者に、草津宮司より、感謝状に記念品が贈られました。

- 地ノ島漁業協同組合 村田 守

- 皇后両陛下、賢所並に、皇太子・同妃両殿下へ悲無無く献上し上げた。今回、感謝状に記念品を贈られた方々は、左記の通りです。

- 大島漁業協同組合 浜田 丹次

- 宗像大社責任役員会が、三月二十六日午前十一時より当社祈願殿会議室で開かれた。

五月祭典案内

一、皇太子・同妃両殿下

- 五月祭典案内
中津宮 一日 月次祭
宗津宮 一日 月次祭
中津宮 五日 節句祭
宗津宮 五日 節句祭

責任役員会開催

宗像大社責任役員会が、三月二十六日午前十一時より当社祈願殿会議室で開かれた。

- 責任役員会開催
宗像大社責任役員会が、三月二十六日午前十一時より当社祈願殿会議室で開かれた。

益裁講習会開催

宗像大社奉納盆裁会が、三月十六日午後一時、また愛好家も盆裁に対

宗像大社奉納盆裁会が、三月十六日午後一時、また愛好家も盆裁に対



三月十六日(日)午後一時、また愛好家も盆裁に対... 盆裁講習会開催

- 宗像大社奉納盆裁会が、三月十六日午後一時、また愛好家も盆裁に対

宗像大社歌会

第二一回

俳句作品集(四)

宗像大社

歌会詠草

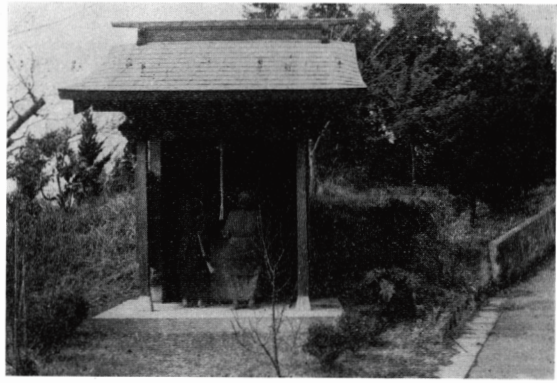
八幡西 磯谷 緑雨 看護婦(みとりめ)の白衣 楚々たり水仙花 鐘崎 岩瀬 辰夫 春風や漁網干しあり船溜り 福間 広渡一寿軒 春の風邪早寝に母の卯酒 田熊 安部 ゆき あたたかや球香こだます老の枝 久留米 入江 文子 筑後川見おろす広き梅の寺 津屋崎 井浦 良介 選挙の声葉桜の地に浸透す 福間 二宮 末子 山鳥の声にぎやかな春の朝 田熊 力丸 一郎 月照るや梅に優しく帽にけり 福岡中央丸丸ゆずる 鳥雲に入りて別れの名残り 宗風会 西田 友一 きぬかつき供へ路傍の午祭 宗風会 吉武 梅香 ささやかな母のたつき紙 宗風会 吉武 勇 曳かれ行く小犬の鈴や春の風 宗風会 中野 きみ 春泥や洗ひ並べし舟帆 宗風会 吉田 杵子 切干の甘き匂ひに乾きゆく 宗風会 有吉 春子 古蹟跡発掘進み水温む 宗風会 木原ふさ子 旧姓を呼び合ふ友らふくの 藤 沢 玄 洋子 西空に行く雲追えり老の春 津屋崎 高田マサ子 崩え出る花の若芽をほぐく みつ今日もひねもす絹の雨 降る

宗像郡考古学散歩

奴山五号古墳 (津屋崎町奴山字正園所在)

いし い た だ し

宗像農協のカントリーエ を越えて、神湊方向にむか レベター、正確にいえば う前方右手の丘陵上に、建 物が見える。特別養護老人 ホーム、津屋崎町である。



ここから見て、奴山五号古墳 (正園古墳、奴山一三三墳 と称す) があつた。津屋 崎園に入る、左手に小さ なるお堂があり、建物の横 に、正園古墳跡という立札 がたつていて、この堂は正 園権現御堂と呼ばれる。土 所有者の高山家が昭和五四 年に寄進したものである。 室内に小さな石祠があり、 その後に平べったな約二メートルの石が立ってあつた。 だが、これは正園古墳の石 棺の蓋石である。私がこ こを訪れた時、老人ホーム入 園の二人の老妻が熱心に話 してあつた。

沖ノ島・特別地区となる(上)

沖ノ島は、昭和五十八年 三月十四日付の公布をもつ て、福岡県の「自然環境保 全地域(特別地区)」に指 定された。これは昭和四十 七年十月十八日制定による 福岡県条例二十八号「福岡 県環境保全に関する条例」 に基づくものである。

このように自然度の優れ 土石を採取すること、 3、鉱物を採掘し、又は 2、宅地の造成、開墾、 その他土地の形質を変更す ること、 1、建築物その他の工作 物、新築、改装、増築す ること、

(29)

部には奴山五号(前方後 円墳、全長五メートル) その右手には二四号墳、更 に二十号墳(周溝を含めた 復元外径六七メートルの超 大型円墳)、二五号、一 七号墳がある。また左手に 二六号墳、二七号(前方後 円墳)、二八号墳、二九号墳 等が一列に並ぶようにして 見え、宗像一族の奥津城を 形成してつらねられている。 奴山五号墳も、今は御堂 に残された蓋石一枚を残し て、完全に消滅してしまつ たが、昭和五三年に発行さ れた発掘報告書をもとに、 古墳の姿をたどつてみよ う。

(9)

文化財についての考え

材を使用、側壁は小口壁か ら大きく突き出している。 西側小口は盗掘で抜き取ら れてなかつた。壁の隙間に は板石、角礫等で閉塞され ている。石棺四面には朱を 塗布してあつた。石棺の内 法は長軸で二メートル、床 面まで深さが〇・六五メー トル。古墳は過去二度にわ たつて盗掘を受け、壘形合 子初期の土から二度目は鎌 倉時代の土が推察される。 遺物の出土状態について は報告書から抜き出してみ よう。

(93)

御藏番日記

四月三日 くもり 昨夜の雨風にて、盛りな りし花、みな散り果てぬ。 ひさかたの光のどけき春 の日に、しづ心な花のち ゐらむ。 古今集を想い起す間もな くなる花を、深しと愛でる 人、心なきに惜しむとて、 誰彼しづ心なく、池に浮か ぶ花びらに目を奪われた